



〔原案〕

小島章司

〔演出・振付〕

ハビエル・ラトール

〔音楽監督〕

チクエロ

〔美術〕

堀越千秋

〔パイル〕

小島章司

クリスティアン・ロサーノ

エスメラルダ・マンサナス・サンチェス

アンヘル・サンチェス・ファリーニャ

パブロ・フライレ

ウーゴ・ロベス

〔小島章司フラメンコ舞踊団〕

岡野千春／前田可奈子／柳谷歩美

関 晴光／松田知也

鎌田里代／木内恵津子／木下 環／齋藤洋子

筋野純子／畑もえ祈／大林綾子／久保田晴菜

竹内純子／今泉美恵子／黒川朋子／山形志穂

〔カンテ〕

エル・ロンドロ

ヘス・メンデス

モニカ・ナバーロ・ゴメス

〔ギター〕

チクエロ

サルバ・デ・マリア

〔ヴァイオリン〕

オルビード・ランサ

〔チェロ〕

・ジョルディ・クラレット・アレグレ

〔パーカッション〕

ペドロ・マスエル・ナバーロ・グリマルディ

小島章司フラメンコ舞踊団2011

# LA CELESTINA

第15回 フェスティバル・デ・ヘレス招聘作品

東京凱旋公演

2011年12月2日(金) 7:00PM

12月3日(土) 3:00PM

7:00PM

12月4日(日) 3:00PM

Q<sub>1</sub> テアトル銀座  
PARCO

〔入場料金〕

全席指定・プログラム付

S席10,000円

A席8,000円

ボックス席(2名)20,000円

〔主催〕

小島章司フラメンコ舞踊団

〔後援〕

スペイン大使館

(財)日本スペイン協会

(社)現代舞踊協会

日本フラメンコ協会

セルバンテス文化センター東京

〔お申し込み・お問い合わせ〕

小島章司公演事務局

TEL:03-3498-0923

FAX:03-3498-5442

チケットぴあ

TEL:0570-02-9999

(オペレータ対応)TEL:0570-02-9988

ラ・セレスティーナ  
三人のパブロ





小島章司

Photo by anapalma

今年2月27日ヘレスのビジャマルタ劇場が喝采につつまれた。

観客総立ちでのスタンディングオーベーションを、舞台の中心に立ち、受けているのは小島章司。スペイン独特の、三拍子での手拍子が続く。

2009年11月東京で初演された作品「ラ・セレスティーナ」が、フラメンコの生まれ故郷、スペイン、ヘレスのフェスティバルでこれほどまでの評判をとうろとは誰が予想したことだろう。

世界で唯一のフラメンコ舞踊とスペイン舞踊のフェスティバル、ヘレス・フェスティバル。その15年の歴史において初の、スペイン以外からの国の舞踊団によるビジャマルタ劇場公演。ヘレスのオペラハウスが感動にふるえた。スペイン古典文学「ラ・セレスティーナ」が、チクエロの音楽とハビエル・ラトーレの振り付けでみごとなフラメンコ作品へと姿を変えた。小島のアイデアで、彼がスペインを訪問した皇太子ご夫妻の前で踊った1973年に亡くなった3人のパブロ、パブロ・ピカソ、パブロ・ネルーダ、パブロ・カサルスへのオマージュとしてピカソによるセレスティーナのイメージや、ネルーダの詩、カサルスのチェロで有名になった「鳥の歌」などを取り入れたことが、この作品によりいっそうの深みを与えている。堀越千秋による印象的なオブジェ、美しく効果的な照明や、洗練された衣装に支えられ、みごとな舞台作品として仕上がった小島の「ラ・セレスティーナ〜三人のパブロ」はスペインの批評家たちにも絶賛された。

「劇場フラメンコ舞踊の、これぞまさしく本物のスペクタクルである。」(ディアリオ・デ・ヘレス紙 フランシスコ・サンチェス・ムヒカ)

「舞台芸術をもたらした小島の、文句のつけようがない大成功である。」(エル・ムンド紙 マヌエル・マルティン・マルティン)

「七十歳を過ぎた小島の両性具有的な演技は、ちょうど同じ時間にハリウッドで開催されていた米アカデミー賞のオスカー像に値するものだった。」(ウェブ:デフラメンコ.コム エステラ・サタニア)

「2011年フェスティバル・デ・ヘレスの観客をわしづかみにした」(ウェブ:フラメンコワールド シルビア・カラド)

「巨星小島章司による美的澄明と練りに練った演技がフェルナンド・デ・ローハスの原作に命を吹き込むという偉業を達成した」(ウェブ:フラメンコ・エン・ビーボ ハビエル・フリエト)

このスペインでの好評を受け、「ラ・セレスティーナ」が東京に凱旋する。

百年にならんとする日本のフラメンコの歴史に残る、この名作を、本場スペインでも高い評価を受けたこの作品を、見逃しては一生の不覚だろう。〈文:志風恭子(フラメンコジャーナリスト)〉

2009年11月、ル・テアトル銀座で初演された「ラ・セレスティーナ〜三人のパブロ〜」

フラメンコの本場、スペインでの公演を経て、パワーアップしてル・テアトル銀座に帰ってくる。

いつか、ピカソを作品に、という小島の思いは、2007年「戦時下の詩人たち」を振りつけたハビエル・ラトーレとの会話の中で、次第に形作られていったのだった。

パブロ・ピカソが亡くなった1973年、「鳥の歌」やパッハ『無伴奏チェロ組曲』で知られるカタルーニャ出身のパウ(標準スペイン語でパブロ)カサルス、そしてスペインともゆかりの深いチリの詩人パブロ・ネルーダも亡くなった。そしてその年は、小島がスペインを訪問した当時皇太子だった今上天皇皇后両陛下の前で踊った年でもある。3人のパブロは、16世紀のスペイン版『ロミオとジュリエット』といわれる、『ラ・セレスティーナ』という舞台に出会うことになったのだ。現代スペイン舞踊界を代表する振付家、ハビエル・ラトーレの構成・演出によるこの作品は、18年の長きにわたり小島章司公演の音楽をつとめるギタリスト、チクエロの繊細でドラマティックな音楽を得て、フラメンコの歴史に残るものとなった。

その作品がフラメンコの生まれ故郷、南スペイン、ヘレスのフェスティバルに招待されたのは2011年2月。それまでも、小島個人による公演はたびたびあったものの、自らの舞踊団を率いてのスペインでの作品公演は初めてのこと。初演後、アキレス腱断裂などのアクシデントを経ての舞台だったが、そんなブランクなど、まったく感じさせない舞台は多くのスペイン人を感動させた。

スペイン国立バレエ団で主役を踊っていたクリスティアン・ロサーノが恋にときめく凛々しい貴族の青年カリストを踊り、彼が見初めた初々しくも魅惑的なメリバは新星エスメラルダ・マンサナス・サンチェス。そして二人の仲をとりもつ売春宿のおかみ、タイトルロール、老女セレスティーナを踊る小島章司の重厚で神秘的な存在感。ウーゴ・ロベスら若手舞踊手のフレッシュさに彩られ、小島門下の舞踊団員たちも華やかに美しく物語の中に生きている。ラトーレが「僕の作品の中で最も完璧なもの」という「ラ・セレスティーナ」はスペインの見巧者たちの心をもとらえた。

「アントニオ・ガデスの『血の婚礼』、スペイン国立バレエ団の『メデア』につながる、素晴らしいフラメンコの劇場作品」と、フェスティバル監督イサマイ・ベナベンテ氏も絶賛。

ラトーレ自身が「僕の振付作品の中で最も完璧なもの」と言い切った「ラ・セレスティーナ」。

フラメンコの故郷で、新たな生命を吹き込まれ、東京での凱旋公演に今、のぞむ。



エスメラルダ・マンサナス・サンチェス  
クリスティアン・ロサーノ

Photo by anapalma



ハビエル・ラトーレ



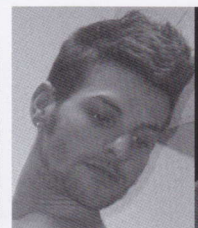
チクエロ



クリスティアン・ロサーノ



エスメラルダ・マンサナス・サンチェス



アンベル・サンチェス・ファリーニャ



パブロ・フライレ



ウーゴ・ロベス



エル・ロンドロ



岡野千春



前田可奈子



柳谷歩美



関 晴光



松田知也



鎌田里代



木内恵津子



木下 環  
齋藤洋子



■「ラ・セレスティーナ」

——スペイン版ロミオとジュリエット

『ドン・キホーテ』のセルバンテス、戯曲家ロペ・デ・ベガ、カルデロン、詩人ゴンゴラ、画家ベラスケス——16世紀から17世紀にかけて、スペインは文芸・芸術の巨人を次々と輩出しました。〈黄金世紀〉と呼ばれるこの時代のさきがけの一つとなったのが悲喜劇の小説『ラ・セレスティーナ』（1499年）です。戯曲形式で書かれたこの小説は、当初は『カリストとメリベアの悲喜劇』というタイトルでした。しかし主人公の青年と娘の仲を取り持つ老婆セレスティーナの造形が傑出し、その存在感が圧倒的なため、現在のスペイン文学史上では『ラ・セレスティーナ』というタイトルで知られています。スペイン版ロミオとジュリエットといえる作品です。

〈あらすじ〉

貴族の青年カリストが鷹狩りの最中、とある庭園に迷い込み、美しい娘メリベアに一日惚れる。すげなくふられてしまったカリストは召使二人の勧めで、取持ちの老婆セレスティーナに相談する。奸智に長けたセレスティーナは弁舌巧みにメリベアを説得、メリベアの心にかリストへの激しい情熱が生まれ、若い二人は熱烈な恋人になる。セレスティーナは仲介の報酬としてカリストから金の鎖をもらう。欲に目がくらんだ召使二人はセレスティーナを殺す。セレスティーナの下働きたちはカリストへの復讐を誓う。メリベア宅の庭園で逢瀬を楽しんでいたカリストは街路で物音を聞きつけ、確かめようとして梯子から足を踏み外し、転落死する。悲嘆に暮れたメリベアは塔から身を投げ後を追う。

■ピカソ、ネルーダ、カザルスで描く「ラ・セレスティーナ」の世界

画家パブロ・ピカソ(1881-1973)、チリの詩人パブロ・ネルーダ(1904-1973)、チェロ奏者パウ(パブロ)・カザルス(1876-1973)。絵画、詩、音楽の巨人である彼ら三人はそれぞれファーストネームがパブロであることからスペイン語圏では「三人のパブロ」と称されます。

『三人のパブロ ～ラ・セレスティーナ～』は、これら不世出の芸術家三人にオマージュを捧げる舞台です。

7万点にも及ぶピカソの画業の中から小島がインスピレーションを得たのは、愛し合う者同士がお互いをむさぼり食い一体化するかのような烈しい筆致の『接吻』（1969年）と『抱擁』（1970年）。そして15世紀末の小説『ラ・セレスティーナ』をモチーフにした一連の版画です。

チリ生まれの詩人パブロ・ネルーダの代表作は初期の詩集『二十の愛の詩と一つの絶望の歌』。今もなおスペイン語圏で広く愛されている詩人です。「一つの絶望の歌」の世界は「ラ・セレスティーナ」の悲劇と響き合う内容です。

パウ(パブロ)・カザルスは2005年の公演『鳥の歌 A PAU CASALS』で既にオマージュを捧げました。今回は若い貴族の青年と娘の愛を、カザルスが発掘したパッサの『無伴奏チェロ組曲』を使って謳い上げます。

聖と俗、具象と抽象、その両方を包み込むピカソの巨大な世界。カザルスの妙なる調べ。ネルーダの繊細な詩情。これらを一つの作品に紡ぐ題材として選んだのが『ラ・セレスティーナ』です。『ラ・セレスティーナ』は（スペイン版ロミオとジュリエット）と言える戯曲風の小説で、たちまちヨーロッパ各国で翻訳され、後代のリアリズム描写に大きな影響を与えました。主人公セレスティーナは売春宿を経営する奸智に長けた老婆で、若い恋人の仲を取り持ちます。スペイン文学史上最初の巨大な悲喜劇的人物です。

■天才ハビエル・ラトーレの演出、堀越千秋の美術

構成・振付は現代スペイン舞踊界を代表する振付家・スペイン舞踊家である、ハビエル・ラトーレ。小島章司フラメンコ舞踊団との関わりでは2007年の公演『戦下の詩人たち「愛と死のはざままで」』の構成・振付を担当。この作品は天皇皇后両陛下のご高覧を賜り、第39回舞踊批評家協会賞を受賞しています。

スペイン国立バレエ団をはじめとする一流のアーティストたちに数多くの振付作品を提供してきたラトーレだが、ヘレス公演の記者会見では『ラ・セレスティーナ』を「私の最も完璧な作品」と評しています。

美術は30年以上スペインに住み、ANA機内誌の表紙の絵などでもおなじみの画家、堀越千秋。フラメンコにも造詣の深い堀越氏は高評を博した『戦下の詩人たち』『越境者』（2008年）に続いて3作連続の参加です。

■豪華な出演者、音楽監督チクエロ

出演は小島章司と小島章司フラメンコ舞踊団の他、元スペイン国立バレエ団で、名作『メデア』、『フエンテオペーナ』、『ロコ』など数多くの作品で主役を踊っていた卓出したスペイン舞踊家クリスティアン・ロサーノと、

マドリッド出身の新星エスメラルダ・マンサナス・サンチェスが悲恋の主人公たちを演じます。ハビエル・ラトーレに見出され、国立バレエ団ソリストのタマラ・ロペスの後を継いでヘレスで主役を踊ったエスメラルダはフレッシュで官能的な新しいメリベア像を打ち立て、観客を魅了しました。

さらにパブロ・フライレ、アンヘル・サンチェス・ファリーニャ、ウーゴ・ロペスというスペインの3人の若手男性舞踊手たちが作品に厚みを与えています。

舞踊団のメンバーも成長著しく、岡野千春、前田可奈子、柳谷歩美、関晴光、松田知也を中心に、日本及びスペインの各メディアなどからも高い評価を頂戴しております。



LA CELESTINA

ラ・セレスティーナ

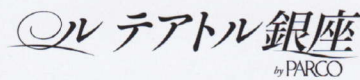
三人のパブロ

2011年12月2日(金) 7:00PM

12月3日(土) 3:00PM

7:00PM

12月4日(日) 3:00PM



〔入場料金〕  
全席指定・プログラム付  
S席10,000円  
A席8,000円  
ボックス席(2名)20,000円

〔お申し込み・お問い合わせ〕  
小島章司公演事務局  
TEL:03-3498-0923/FAX:03-3498-5442  
チケットぴあ  
TEL:0570-02-9999  
0570-02-9988(オペレータ対応)

〔主催〕  
小島章司フラメンコ舞踊団  
〔後援〕  
スペイン大使館  
(財)日本スペイン協会  
(社)現代舞踊協会  
日本フラメンコ協会  
セルバンテス文化センター東京

STAFF

原案:小島章司  
演出・振付:ハビエル・ラトーレ  
作曲:チクエロ  
美術:堀越千秋  
バレエマスター:クリスティアン・ロサーノ  
ダンスミストレス:岡野千春/前田可奈子  
柳谷歩美  
衣裳:山田尚希〔エイム〕  
立川広子〔ナジャハウス〕  
照明:大島祐夫〔A・S・G〕  
音響:田中賢〔エス・シー・アライアンス〕  
舞台監督:舩田勝敏〔ダイレクト〕  
仮面:正法地美子  
ヘアメイク:佐々木純子  
宣伝美術:宇野亜喜良  
宣伝写真:山廣康夫  
翻訳・制作協力:古屋雄一郎/志風恭子  
企画・制作:株式会社エストウディオ コジマ



ヘス・メンデス モニカ・ナバーロ・ゴメス サルバ・デ・マリア オルビード・ランサ ジョルディ・クラレット・アレグレ パロ・マヌエル・ナルゴ・グマルティ



筋野純子 畑もえ祈 大林綾子 久保田晴菜 竹内純子 今泉美恵子 黒川朋子 山形志徳



マリオ・マヤ、アントニオ・ガデス、ホセ・グラネーロといった舞台の巨匠たちが開拓した劇場フラメンコ舞踊の、これぞまさしく本物のスペクタクルである。美術から振付まで、衣装から照明まで、どれをとっても「ラ・セレスティーナ ～三人のパブロ～」は全きトータルシアターだ。……あらゆる古典作品がそうであるように、普遍的で時間を越えた古典が劇場フラメンコ舞踊にアレンジされ、まるでサイレント映画のように、出演者の音楽と仕草と表情だけでストーリーが進められる。

官能の帝国 「ヘレス日報」紙 *Diario de Jerez* 2011年2月28日

原因と結果が結びつき、人物の人間的な強さが音楽によって強調され、愛と死のコントラストがセレスティーナの前に屈服する。小島の演技によってセレスティーナは良心のかけらもないモラルの化身として後世に残る。

小島、情熱に芸を加味 「エル・ムンド」紙 *El Mundo* 2011年2月28日

それにして小島の踊りの見事さよ、愉しさよ。全身から発せられるエネルギーに、……絶品。

日出づる国の「ラ・セレスティーナ」

「ラ・ボス・ディヒタル」紙 *La Voz Digital* 2011年2月28日

七十歳を過ぎた小島の両性具有的な演技は、ちょうど同じ時間にハリウッドで開催されていた米アカデミー賞のオスカー像に値するものだった。

その演技力は踊りを上回るものだった

アカデミー賞もの演技

フラメンコ専門サイト *deflamenco.com* 2011年2月28日

2009年11月に東京で初演した「ラ・セレスティーナ～3人のパブロ～」がスペイン、ヘレスで行われた世界で唯一のフラメンコとスペイン舞踊のフェスティバル、第15回フェスティバル・デ・ヘレスに招かれたのは今年の2月のことでした。私の舞台作品を長年手がけてくれているギタリスト、チクエロの音楽と、スペイン舞踊界を代表する天才、ハビエル・ラトーレの演出・振り付け、スペインと日本との混成チームでつくりあげたこの作品はおかげさまで、観客からも、批評家からも素晴らしい賛辞を頂くことができました。私が長い間、フラメンコという異国の文化に敬意をもって真摯に取り組んできたことに対する一つの結実の形だったと思います。

私の人生の中で最も重要な舞台作品の一つとなりました。

フラメンコ揺籃の地ヘレスの空気が、フラメンコの歴史をつくりあげてきた歴史上のアーティストたちの存在が、私を踊らせてくれている。そうヘレスで実感したことが、もう一度日本で公演をしたいという思いへとつながりました。スペインの大舞台を経て新しい命を得た「ラ・セレスティーナ～3人のパブロ～」にご期待ください。

小島 章司